

創刊

準備号
(2)

毎月 19 日発行

福祉と介護のミニコミ誌

ふれ～ず



(画 amor amigo)

【トピック】

- ◆特別寄稿 日常生活圏域の核となる「地域拠点」のあり方
- ◆連載 心地よい関係性のバランス
- ◆私の子育て奮闘記

特別寄稿 日常生活圏域の 核となる 「地域拠点」のあり方 (2)

山越孝浩

③ 地域課題を掘り起し、地域住民、自治体とともに解決する機能

運営推進会議や地域の人たちとの交流から地域課題を掘り起し、発見する機能については、地域福祉コーディネーターが地域の課題に取組むことを意識的に行うことが重要である。地域住民から出された(つぶやかれた)課題について放置することなく次に繋げていくことが周囲の信頼につながり、拠点機能として認められることにつながっていくのである。

「つなげる」ということは、地域福祉コーディネーターが全て解決するというのではなく、課題によっては行政機関や関係機関に伝えること、課題について必要な人を集めること、課題について話し合う場を提供することなど、様々な関わり方がある。そして地域の課題について「関係ない」という他人事ではなく、主体的に関わりを持つ姿勢がとても重要である。

福岡市の事業所の事例では、認知症の方を地域で支えていくためには、介護保険サービスのみにその人の暮らしを支援するのではなく地域社会全体で取り組んでいく必要が不可欠であると考へ「カフェ」の活動を行っていた。

事業所は専門職として、これまで自分たちが培ってきた知識やノウハウ、経験値といったものを地域に還元していくという発想も必要であると考へる。そのためには、出向いていくことで顔を覚えてもらい会話する。

地域と関わり、一緒に考へていくことで新たな発想や推進力が備わってくることにつながる。

④ 人材育成機能

高齢期を迎え認知症や要介護状態になった時に、自分の希望どおりの生活が送れるのだろうかと考へた時、現状では非常に厳しい。それは社会保障の制度や介護を取り巻く環境などについて情報が伝えられたとしても難しすぎてよくわからない、元気な時は興味がなく、介護が必要になった時に慌てて情報収集をしてもよくわからないなど、とにかく理解することは「難しい」のである。そのため専門職へ依頼するのであるが、専門職も「その人の望む生活の継続」を実現できるほどに成熟していないのである。

この課題を解決していくためには専門職だけに頼ることなく、生活者本人である地域住民が専門職や行政とともに課題を

共有し、行動することが必要である。地域の人や専門職、行政機関との双方向の情報交換や、適切な支援ができる人材育成、つながりや活動できる場などの環境づくりなど、ともに学び、参加し体験する機会の提供が必要となる。そこからつながり、ともに働く仲間づくり、つながりの場づくりが生まれてくるのである。

⑤ 地域の駆け込み寺機能

介護が必要な状況に突然なつた時、何をどうしていいかわからない、冷静に時間を掛けて取り組むことができないような状況の時に「取りあえず支援する」といった即時的・即応的な支援が求められる。

このような「困った時にいつでも対応してくれる場所」が身近な地域にあることは大きな安心につながるのである。

⑥認知症の啓発拠点

認知症ケアは家族や個人だけで解決できるものではなく、周囲の理解と協力が不可欠である。周囲が認知症について理解を深めることや、認知症の人や介護者への継続的な支援の取り組みが必要であり、一人で支えるというよりは繋がりを持ってチームで取り組むことが大事である。

もちろん、認知症サポーター養成講座や介護教室等の直接認知症の学習をする機会を提供することも重要であるが、これまで述べてきたとおり、つどいの場での交流を通してや、運営推進会議のような場においての事例検討のなど、隣近所の身近な方を通して認知症とは何かを話すことも啓発効果としては大きい。

⑦生活支援サービス提供拠点

機能

生活支援サービスとは、食事サービスや買い物代行サービス、移送サービスなどが考えられる。地域福祉コーディネーターにおける生活支援サービスとはサービスの種類を作り出すということではなく、一人ひとりのそれぞれに必要な支援のあり方を考え、作り出す場として表現している。

例えば配食サービスの場合、本人に買い物はできないが調理する能力はある。全てのおかずを調理することはできないがご飯は炊けるなど、それぞれ支援して欲しい内容は違う。しかし、できることもできないことも十把ひとくりに「配食サービス」としてしまった場合、食事を配ることが目的化され、その人が本来持っている機能（できること）をどのように活用するのか、どのような支援が必要なのかといったきめ細かな支援を行うことが難しくなる。生活支援サービスとはできることを奪うサービスではないはずである。

生活支援サービスは、本人の生活を通じて足りない部分を支援するために、地域の人たちの力を借りるものである。生活支援サービスを数多く立ち上げ、メニューを整えても、必ず埋められない「隙間」が生じ、その隙間をまた「生活支援サービス」で埋めるといったことは無意味だと考える。よって、一人ひとりを支える個別ケアの延長線上で、本人にとって必要なもの（こと）は何かを隣近所や知人、友人、民生委員を中心とした地域住民や、高齢者こころまちセンターをはじめとした介護事業所等の専門機関が、膝を突き合わせ、ともに考えるプロセスの中から必要な支援（サービス）は生まれる。地域福祉コーディネーターモデル事業の拠点である小規模多機能型居宅介護は、包括報酬という特性上、「通い」や「訪問」といったサービスから利用者を捉えるのではなく、ニーズから捉えることに長けている。生活支援サービス

の場合も、配食サービスグループを組織化することが目的ではなく、きめ細やかに一人ひとりに対応していった結果、その工夫や取組みを支援する住民同士で情報交換したり、共通化できることを一緒に取組むことで効率化する場合に初めて生活支援サービスとして1つのサービスが生まれるものとしなければ、形骸化してしまう恐れがある。従来の介護ボランティアが、養成されてもその力を発揮できないのは、組織化が目的であったと考えられる。

この地域に「何が必要」で「どんな支援が必要」なのかを保険者や行政任せにするのではなく、地域福祉コーディネーターが地域住民とともに考え、必要に応じて自ら支援の方法を考えることのできる「場（拠点）」が必要なのである。

⑧生きがいづくり機能

高齢になると、自分でできる

ことが徐々に減っていくと「自分のできること」から「人にやってもらうこと」の方が多くなり、役割の喪失や、他者とのつながりが減少していく。それは、本人の生きる力をそぎ落とすことにつながる。

生きがいは「役割を与えること」ではなく「自身の気持ちがあり、動いて行動に移すこと」であり、その「気持ち」が生きる力に結びつくことで、生活の中で良い反応が連鎖していくのである。「集いの場」や「多世代の集会的機能」を活用してこれまで培ってきた習慣や技術を活かすことができる機会を多くつくりだすことは生きがいの生み出すきっかけとなるのである。

⑨ つなぎ機能

生活を継続するためには、介護サービスだけではなく、それまで本人が培ってきた環境（人・場所・物・機能）の糸を紡ぎ直すことが重要である。

「つなぐ」とはネットワークを作ることであり、基礎となる資源は地域の中の、より身近なところに、多く存在している。しかし「地域の資源（人・場所・物・機能）」の中には隠れているものも多くあり、草の根的にひっそりと活躍しているものもある。

地域にある資源を発掘したり、現状の資源をもっと多くの人が利用できるように発展させたり、新たな資源を作りだし、それぞれが効果的に活動できるようにネットワークを作るなど資源が有効に活用されるようコーディネート機能が必要である。

連載

心地よい関係性のバランス

第14回 介入ポイントを定める絶妙なバランス

『一人は危険？』

ときどき、新人ヘルパーの外支援に、少し後ろからついていくことがある。私は支援の仕事の基本を入所施設で身につけたので、そのような指導はされなかつたのだが、ヘルパー業務は勝手が違う。入所施設で支援技術を学ぶ時は、よくも悪くもお手本がある。自分の信じたやり方に一番近い先輩のやり方を真似すればよいのだ。また自分の支援も常に人の目にふれている。おかしな支援をすると、先輩職員はもちろん、利用者の口をとおして多くの人に伝わってしまう。このような環境の中で仕事をすると、職場の環境自体に問題がない限り、そう大きくはずれることはないような気がする。

一方でヘルパーは基本が1対1の業務だ。最初の数回は先輩

が同行したとしても、すぐに任せられてしまう。自分の対応が正しいのか、間違っているのか、聞くこともできず、自分で考え、自分で判断するしかない。それは、実は非常に危ういことだと思ふ。福祉の仕事に、「絶対」はない。唯一の「正解」もない。だからこそ、常に迷い、常に試行錯誤を繰り返す。それが福祉の仕事なのだが、一人で試行錯誤を繰り返すと、とんでもない間違いを犯してしまうこともあるし、何よりどんどん孤独になる。

『びつくりする瞬間』

そんなわけで、ときどき新人ヘルパーの仕事を遠くから眺め、一緒に検証するようなことをする。すると、意外なことに気づく。私と外出すると、何もかも頼ってしまつて、まったく



自分でやろうしない利用者が、新人ヘルパーと一緒にだと、自分から行動するような姿を見る。びっくりする瞬間だ。確かに、私のほうが新人ヘルパーに比べると遥かにその利用者の言いたいことや、考えていることは理解できる。しかし、理解できるからこそ、便利に使われ、利用者が本当は自分でできることまで、うっかりしてあげてしまっているのだ。ところが相手が新人ヘルパーで、話を通じないとわかると一転、自分でやろうと思うとは、なんともたくましい限りだと思う。こんなふうに、いろいろな人との間に、いろいろな関係性を築ける人は、福祉サービスという関係性であつても、豊かな人間関係の中にあつたほうが、暮らしが広がるようにも思う。ヘルパーを使うこと自体が、社会参加であるという気さえする。

『説明しようがないバランス』

私たちの仕事にはさまざまな

役割がある。ときには、非常に専門的な知識と技術を要することもあるが、慣れていない人には慣れていない人ならではの役割もある。たとえば利用者がいつも同じヘルパーがいいと思つていたとしても、長い目で見た場合、あるいは本人が気づいていない本人のニーズとして、いろいろなヘルパーと関わることに大きな意味があることもある。でも、そこはとても難しい。

本人がいやだということを無理にすることはできないし、本人がいやだと言っても、そこは状況的に判断して、これがあなたのためなのだとか突き進んだほうがよい場合もある。

しかし、この境目は本当に難しい。いくら、本人のためとはいっても、できれば本人の意思を無視した支援は行いたくないし、下手をすれば人権侵害になつてしまう。だからといって、その人が大切な生きる力を失つていくのを本人がいやがるからという理由で、手をこまねいて

いては、それはそれで問題だ。相手に知的障害がある場合は、なおさらのこと。経験と勘に任せて、「エイヤー！」と介入するということでは、許されないこともある。

いろいろな考え方を考慮しつつも、利用者自身の気づいていないニーズと、まだ気づいていないけれど確かに存在するニーズと、人権感覚と専門的な判断と、さまざまな要素のちようどよいバランスで、支援のタイミングや、介入のポイントを決めているのだが、これはもう、説明のしようがない。でも、説明できなければいけないのかな……と、悩む今日この頃だ。

※この原稿は、Juntos (フントス) C L C 発行の情報誌からの転載です。著者と発行者承諾のもと転載しています。

大友愛美 (おおともよしみ)

北海道生まれ北海道育ち、生粋の道産子です。大学卒業後、最初の福祉現場、知的障害者入所施設では地域と施設をつなぐコミュニケーションカーのような仕事をし、その後は地域で生きる人たちを支える仕事をしました。どちらの現場でも自閉症の人たちとの出会いが多く、たくさん悩み、たくさん学びました。

最近では、共生社会の実現を目指すNPO法人での仕事や、福祉の担い手を育てる場(学校や研修)での仕事をしつつ、自閉症など地域で生きにくい状況を抱えた人たちの相談や支援の仕事もしています。他の多くの人と違っていても排除しない、されない社会の構成員になるためには、学ばなければ、いろいろな人と一緒に暮らす練習が必要なのかもしれない……と感じている今日この頃です。

『びっころ流』

ともに暮らすためのレッスン』

へ1,600円+税 絶賛販売中

※お求めになりたい方は、当法人までご連絡ください。



私の子育て奮闘記

「良い事業所との出会い」

家庭の事情で、次の年の4月から働くことが決まっていたので、長男を放課後児童デイに預けることが必要になり、ご縁のあった2か所の事業所を利用することになった。

始めは、放課後のための居場所と思っていたのだが、振り返ってみると、児童デイに行くことが長男をだいぶ変化させるきっかけとなったような気がする。

児童デイは学校のクラスとは違い、10人くらいの少人数の中で活動をする。学校で30人強のクラスにいる長男にとってはより、自分を表現しやすい場所となった。

この少人数の場所なら、人とコミュニケーションを取りたいという行動が生まれてくるかもしれない。また、何か声を出したことをきっかけにしゃべれるようになるかもしれないと思い、事業所の先生方に面談をお願いした。もし声を発することができたら、可能であれば、先生からのさりげないフィードバックをお願いできないかと相談してみた。何かしゃべれた時に、本人はあまり気づかないかもしれない

が、はじめのうちは、「できたね、話せたね」等とフィードバックを出してもらい、外で話すことの自信や、親がいない場所での「自分でできた、話せた」という経験の積み重ねてほしいと考えたからだ。

その結果、どちらの事業所の先生方も、快くできることはやって行きますように答えてくださった。実際に、取り入れていただいた後は、毎週、毎週できることが増えていくといった風に、変化のスピードが早かった。事業所の帰りの会などで、手を挙げて答えられるようになり、その後学校でも手を挙げて、わかつている答えなら、黒板に書くという変化を経て、今は回答が分かるものは、クラスの中では手を挙げて言葉で回答するまでになっている。

緘黙が変化してきたことと並行して、人とコミュニケーションを言葉で取るのは、本人にとってはまだ難しいところがあるのだが、学校以外にも、子どもの成長とともに、見守ってくれる方がいるということが、本当にありがたいなと思った。

(おとめ)

発達の違いを持つ2児の母。16年続けた社会福祉の仕事を経て、家庭で子どもの力を伸ばすこと、地域で生きることを考えながら日々奮闘中

「Natural Café+Shop hanahaco」から お知らせ！

千葉県木更津市にある「Natural Cafe+Shop hanahaco」には障がいのある方の生活介護サービスが併設されています。hanahacoの生活介護では、利用者さん1人1人の個性を仕事に結び付けるべく、毎日職員と一緒に様々なことに取り組んでいます。

その中の一つに、1人の利用者さんのイラスト&文字描きがあります。とっても個性的でかわいらしいイラストと文字を描く男性なのですが、これを何とか仕事に結び付けようと試行錯誤し、この度、LINEスタンプとしてお披露目できることになりました！

これを機に、彼の仕事の範囲が広がり、地域での生活を続ける一つの手段になるといいなど期待しています。

ちょっとだけお金がかかってしまうのですが、LINEを使われている方は、ぜひご活用いただき、そして多くの方に広めて頂けると嬉しいです！

(<http://line.me/S/sticker/1358564>)



営業日：11時～16時（定休日：火曜）

住所：木更津市矢那 1879-1

電話：0438-38-4368

メール：info@npo-cw.net

Facebook：

<https://www.facebook.com/hanahaco.k/>

Information 福祉・介護・まちづくり等のイベント情報欄

12月10日までに、編集部へ届いた情報です。詳細は、各情報の連絡先にお問い合わせください。また、情報欄への掲載を希望する方は、編集部までご連絡ください。

《第21回 街CAFE さくら》

【1月の催し物】

「お琴の演奏」

日時：2017年1月15日（日）

13:00～16:00

会場：東金市東金1060-6

（SUNFLOWER 1F内）

参加費：100円（お茶代）

問い合わせ先：社会福祉法人ゆりの木会内
認知症カフェ担当 平賀・笠原(0475-50-8111)

《穂垂るの会》

介護している方々が集まって日々の苦労話等を気軽に本音で話し合う会です。

日時：2017年1月12日（木）

13:30～15:30

会場：ふれあいセンター 2階 創作室

経費：200円（昼食代）

主催・連絡先：穂垂るの会・井上

（090-7171-1701）

《東金市生活困窮者自立支援セミナー》

日時：2017年2月10日（金）

13:30～

会場：東金市ふれあいセンター

内容：基調講演・こころん活動紹介

講師：日置真世

（社会的包摂サポートセンター）

参加費：無料

主催・連絡先：ちば地域生活支援舎
0475-53-3630

《キャリアアップ実践講座・東金》

日程：第2回 2017年1月13日（金）

13:00～17:00

内容：「リーダーシップ」

講師：中川清隆（ツクイスタッフ）

会場：東金市ふれあいセンター

（視聴覚室）

定員：30名 参加費：無料

主催・連絡先：ちば地域密着ケア協議会
043-244-2601

《ケアワーカーキャリアアップ講座》

日時：第1回目 2017年2月10日

第2回目 2017年3月20日

会場：東金市ふれあいセンター

内容：「多様性の理解と支援に向けて」

講師：第1回目 日置真世

第2回目 大友愛美

参加費：無料

主催・連絡先：ちば地域生活支援舎
0475-53-3630

《広がれ！

子ども食堂の輪全国ツアー in ちば》

日時：2017年1月15日（日）

10:00～16:00

会場：千葉市文化センターアートホール

内容：講演、パネルディスカッション、
リレートーク、まとめのセッション

主催・連絡先：広がれ、こども食堂の輪！
全国ツアー in ちば実行委員会
043-245-1102

《コミュニティケアワーカー実践講座・君津》

日程：2017年2月1日（水）

9:00～12:00 ライフサポートプランを学ぼう

13:00～16:00 チームケア

会場：君津市保健福祉センターふれあい館

参加費：無料

主催・連絡先：ちば地域密着ケア協議会

043-244-2601

《ノーマライゼーション学校支援事業》

日時：2017年1月28日（土）

会場：千葉県教育会館 203 会議室

内容：「誰にでもできる支援へ向けて

—小学校通級指導教室より」

「誰にでもできる支援へ向けて

—暮らしの中から」

定員：100名 参加費：各1,000円（資料代）

問合せ：ちばMDエコネット事務局

047-426-8825

《コミュニティワーカー実践講座・八街》

日程：2017年2月7日（火）

13:00～16:00 地域との関わり視点

2017年2月8日（水）

9:00～12:00 ライフサポートプランを学ぼう

13:00～16:00 チームケア

会場：八街市役所第1庁舎3階第1会議室

参加費：無料

主催・連絡先：ちば地域密着ケア協議会

043-244-2601

《キャリアアップ実践講座・木更津》

日程：第2回 2017年1月12日（木）

13:00～17:00

内容：「チームワーク」

講師：中川清隆（ツクイスタッフ）

会場：木更津市立中央公民館

（第1講習室）

定員：30名 参加費：無料

主催・連絡先：ちば地域密着ケア協議会

043-244-2601

サポート会員募集

「ふれーず」の編集・発行を応援いただけるサポート会員を募集します。

応援いただける方は、ぜひ、ご連絡ください。

【内容】

会費：1口3,000円（※個人・団体）

期間：年度単位

【連絡先】

特定非営利活動法人ちば地域生活支援舎

総務・企画課（0475-53-3630）



＜表紙画 amor amigo さんの紹介＞

イスラエルに縁ある夫、ペルーに住んでいた妻、17歳差の夫婦ユニット。山口県萩市で私たちが娘と暮らすのは、毛利の殿様が参勤交代で通ったお成り道に面した築200年の古民家です。そこで、イラスト業と並行しつつ、祖父から注いだ画材屋、重厚な梁が残る古民家BAR、ピタサンド専門店、アート教室などを営んでいます。

発行元：ふれーず編集部

千葉県東金市東金425-2（鶉嶺の家内）

TEL：0475-53-3630

編集責任者：宮下・太齋

発行部数：500部

「情報誌」という位置づけになったとたん、発行に向けてのハードルがグンと上がった。デザイン・内容・費用などなど、課題は山積み！やっぱり仲間が必要だ。新年からは、仲間と共に発行を目指します。応援してください！（To）